障害のある幼児の保育効果について(IV) —入室時の肉わりを中心に—

○鈴木裕子 金平文二 巻野悌郎 後藤嘉余子 (東京家政大学)
 芝辻益子 上野乙美子 (東京家政大学・わかさグループ)

はじめに

発達上の問題をもつ子どもは、その過程において健常児とは異なる傾向を示し、母親の戸惑いや不安を一層強めている。従って子どもの発達を助長するよう働きかける一方で、母親には子どもの現状把握と本質的問題の理解を促し、適切な養育行動の確立をはかる必要がある。殊に、不安定で緊張感の強い入室初期の状態を考えると、母親と子どもの行動を観察し、援助行動の方向性を探ることが重要な課題となる。保育者、子ども、母親間に好ましい関係を築き上げるこの時期の関わりが、後の指導効果を左右すると言っても決して過言ではなからう。この契を踏まえ、今回は、入室当初の母子への援助行動・役割について検討することを目的として、入室直後の母親と子どもの活動とどうして問題の背景を探り、母子への関わり方、援助活動のあり方について考察する。

方法

東京家政大学附属障害児保育グループ(わかさグループ)に入室してきた2組の母子について、保育中の活動とVTRに録画し、後日活動の内容、行動の特徴を記録した。また事例をまとめるにあたり、入室時の面接資料、個人記録を参考とした。

事例の概要

事例Ⅰ W・Y (1歳11ヵ月・女児)

主訴: ことばの遅れ

家族構成: 父・母・兄(5歳)・Y子

入室までの様子: 頸座—3ヵ月、歩行—1:9(共に不安定)1:4より歩行訓練、1:11に3m歩く。移動はほとんど這行。乳児期はあまり泣かずおとなしかった。ものに手を押ささないことから小眼球症(左眼)が判明検査の急の入退院を繰り返す。入院後は表情が乏しくなった。放っておいても一人で指を吸いながら眠り、マシマシすることが多かった。視力に困ってはこの子なりに見える世界を生温しめていると思ひ、あまり気が付いていなかった。発語、コンニチワ、アッタ、タタ(パパ)、デンキ、驚きの発語はみられる。歌の真似をよくする。対人行動・人見知りはない。自分から肉わりをもとるとはしないが、働きかけには応じる。最近よく笑うようになり、表情に変化がみられるようになった。声はよく本している。

保育室の様子: 1. 運動間)・這行で手押し車のとこへ行きつかま、マ立ち上がり、押して歩く、車から手を離し、膝立ちでウロウロする。這行でおもちゃのある所へいき、坐り込んで人形を取りまね遊ぶ。

・母のいるスベリ台の所まで歩いていき、スベリ台の階段をス・3段登る。(母が後で介助)

・母と手をつないで歩き、集まりの場所に移動する。

2. 活動) B子のすることとまよみている。B子が投げ入れたシャベルを目で追ひ、箱の中からお取りまねしてほらく見ている。箱の中に戻す。

・A男のすまことを見ている。A男がビンと振ると(音がする)それに合わせて自分の体をゆらす。

・母親がチューリングをほめて持ち上げる。(Y子の目の高さ)自分のも持ち上げ母に見せながら声をあす。

・母がY子の手を持ちビンの中の玉を取り出す。ビンの中に玉を入れ振り、Y子はじっと見ている。自分でビンを振り、中の玉をつまみまねし、戻してまた振り。

・歌に合わせて体を動かしたり、手を動かしたりする。

・名前を呼ばれると手と上り、皆の拍手に合わせて自分も手をたたく。

3. 肉わり)・保育者が身体に触れ「Y子の探していたのはあれ」と(Y子と母の間に何かせて)指さすと、保育者の指さしたものをみつめる。

・保育者が「ファー」と言いながらY子に積木を押し出すと、Y子も同様に保育者に押し出す。(くり返し)

・Mが向き合って手をあすと、手をつなぐ。

事例Ⅱ U・O (2歳1ヵ月・男児)

主訴: ことばの遅れ

家族構成: 父・母・U男

入室までの様子: 頸座—4ヵ月、歩行—1:1

乳児期はおとなしい子だった。3ヵ月頃首のあそものを示すと笑ったり、抱くと喜んで泣いた。10ヵ月頃に母の後追いをすることがあった。一人で絵本を見たりミニカーをいじって遊んでいることが多い。公園などに連れていくと目的もなく走り回っている。叱るとその人の顔色を見て瞬間動作を中止するが、持続しない。午乳をコップで飲んだ後などに「ちょうだい」と言う手渡す時がある。言葉と教えたも反応はみられない。要求がある時は母の手をひいて目的の場所に連れてい

く、発語 1:5 の頃、父の帰宅時に顔とみて「バー」と言うが、それ以来言葉らしき発語はない。対人行動自分から肉わりを求めることはなく、同年齢の子どもと一緒にいても交流せず、働きかけられても感じない。新しい場や人慣れるのに時間がかかる。

保育室の様子： 1. (活動) 保育室の中をキョロキョロしてはぐら動き回り、ている。道具の棚の前で立ち止まり中の道具に触れると、すぐにウロウロ歩き回り、部屋の隅にいた母の所にいき手をつなぎ、母と一緒に歩き回る。トランプのいる所に行きしが棄、ているのを見て、その場で地団駄を踏む。(要求が通らない時に現れる行動) 母は気づかず他の所に行ってしまう。頃はバンバンと手でトランプを叩き、とみている。保育者が話しかけるが、U男はチウッと保育者とみて走り、キョロキョロしてはぐら動き回り、母とみつきて手をつなぐ。

- ・ドアの取手を触りにいく。(よく現れる行動)
- ・(集まりの場面) 体とくねらせたり、椅子に坐ったり降りたりとよく動き落着かない。保育者に名前を何度か呼ばれるが、全く違う方向を見つめて感じない。
- 2. (肉わり) 母に連れられて椅子を取りに行くが、U男は母と人のいない方にひっぱっていきこうとする。
- ・U男がU男の傍に近づくと、後ずさりするようになってくる。
- ・Mが手をつなごうとすると母に抱きつく。再度手をあくと逃げ去る。
- ・保育者がU男の頭に触れると、上目使いに保育者とみて、母にまわりつく。
- 3. (母との関係) 車を見つめて母に手渡すが、母はそれを机の上に置く。U男はそれをまた取り母に渡すと母は床に置く。U男はウロウロし始め、落ちていたものを拾って坐り、また投げてくる。
- ・坐って遊んでいるU男の隣に母が来て坐り、道具の使い方を話している。U男は聞こうとせず、そのまま自分のやり方で遊びを続ける。
- ・母がU男に道具を渡そうとすると、U男が受け取らず、自分で道具を取り出し、持って畳の所に行く。母が隣に来て坐ると、チウッとみて、持った道具の一つを母に渡す。歩いてドアの所に行き、ノブとさわっている。

考察

事例Ⅰは言葉の遅れと合わせて運動発達の遅れが認められるケースである。小眼症状という生まれつきのハンディキャップを構っているために、入退院を繰り返して来たことが遅れと結びさせたとも言える。単眼での視界は両眼視に比べ、はるかに狭いことを考慮し

に肉わりが必要であろう。歩行の遅れも訓練の結果により徐々に確立されてきている。長距離の移動は這行にむかひ、歩こうとする支持は認められ、独り歩きへの移行期である矢張りからもうかがえる。介助しながら安定した歩行へと導くことが必要であろう。また(2)から、ものや人への肉心があてきている様子が見られ、目的をもって行動しており、模倣をうけて活動を楽しめるようになってきている。母親も子どもの見えやすい範囲にものを呈示するなど、視界を考慮した行動がとれるようになってきている。また(3)より明らかに、保育者との肉体は十分ではないが、指さしや声かけには感じようとする姿勢が認められる。母親と核を離れながら、徐々に肉わりの範囲や活動を拡大していくことが期待できる。意味のある言葉は活動場面ではまだ認められないが、(1)の叙述にあるよう、肉連のための発声は認められる。その時々状況に応じて、Y子の視界を確認しながら、言葉かけや、やりとりを行っていくことが大切であろう。

事例Ⅱは言葉の遅れと行動上の問題をもつケースと云える。入室前の様子から対人行動の問題と伴う言葉の遅れと捉えることが適切であろう。(1)にみられるように、目的もなく室内を動き回っていることが多く、必ずと言ってよいほど母親を探し手をつなぐ行動がみられる。不安と緊張の強いことが理解される。また人の多い所を避ける行動や、見知らぬ人に対する恐怖心とも言えるもの(2)の叙述の中にもうかがえる。肉わりを求められ、ことはU男の肉感的で落着きのない状態を一層助長してしまおうように思われる。母親が集団の中で唯一頼れる存在であることは推察されるが、(3)で述べられているように、U男の思いと母親の行動にはずれが生じており、肉着肉連の構築されているとは言いがたい。それが更にU男を不安定にしていると思われる。U男の支持に添った肉わりの母親に必要とされる。傍には椅子ものの、適切な肉わり行動がとれない母親に対し、「すぐに手をつなぐ。行動、母親の傍にいても落着かない不安定さなど、意味をもらえて行動できるように援助していくことが必要と思われる。新しい場や人への抵抗感が強いU男にとって、環境に慣れること、安心してその場に居られるようになることと第一義と考へ、U男への直接的な働きかけは今後の課題として、まずは母親との肉連の再構築、場への慣れを優先して考へていくべきであろう。

事例Ⅲ、Ⅳは主訴と同くは有るが、その背景はかなり異なると言えよう。次々の特徴を捉え、環境調整を含めて柔軟な援助が要求されると言えよう。